

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Exploring the Nature of Be Going to: How It Means What It Means

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 本多, 啓, HONDA, Akira メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2024

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



Be Going To はどのような仕組みで未来を表わすのか について、たどたどしく考える

本多啓

1. はじめに

この章では、一般に「未来」を表すとされる *be going to* を取り上げます。特に、*be going to* はどのような仕組みで未来を表すかという問題を考えていきます。*Be going to* の仕組みについて、英語学や認知言語学ですでに分かっていることや、分かったつもりになっていることを並べていくのではなく、分かるプロセスをたどっていく形で、たどたどしく議論していきます。

また、議論の過程で、説明の道具立てとして「メタファー」「英語の進行形の意味」「力のせめぎ合い」について説明します。

2. *Be Going To* はどのような場合に使われる表現か：事実の確認

Be going to はどのような仕組みで未来を表すかという問題を考えるに当たっては、話の前提として、この表現がどのような意味・用法を持つかをはっきりさせておくことが必要です。この節では *be going to* に関わるいくつかの事実をまとめておきます。

まずは、次の文を日本語に訳してみてください。それぞれの例で *be going to* がどのような意味合いを込めて使われているか、考えながら日本語にしてください。

(1) We **are going to** get a new car soon. ¹

(2)

a. Look at the sky. It's **going to** rain.

b. Sandra's **going to** have another baby in June. ²

(3)

a. You **are not going to** play football in my garden. ³

b. I'm **not going to** sit up all night listening to your problems! ⁴

c. No, you're **not going to** use that! ⁵

d. Your interview **is going to** be held in my office. ⁶

- e. He's **going to** suffer for this.⁷
 f. You **are going to** do as I tell you.⁸
 g. Nothing's **going to** stop me from succeeding this time.⁹

(1)と(2)はそれぞれ次のようになります。

(1') もうすぐ新しい車を買います(買うつもりです／買う予定でいます)。

(2')

- a. 空見て。雨になるよ(なりそうだよ)。
 b. サンドラは次の子どもを6月に出産します(出産する予定です)。

(1)は「主語(=話し手)が現在持っている意志・予定」を語るのに使われています。(2)は「現在の状況に基づく未来のことについての見通し」を伝えています。

(3)はどうでしょうか。これは少し分かりにくかったかもしれません。

(3')

- a. うちの庭でサッカーなんかしないでくれ！
 b. 一晩中徹夜であんたの悩み事に付き合うつもりなんかないからな！
 c. だめ、それ使っちゃ！¹⁰
 d. 面接は私の執務室で行います。¹¹
 e. あいつめ、このお返しに懲らしめてやるぞ。¹²
 f. 私の言うとおりにしてもらいます。¹³
 g. 今度は何が何でもうまくやってみせるよ。¹⁴

(3a)はSwan(2005:214)で「命令・拒絶」(commands and refusals)に使われるとされているもののうち、「命令」に当たる例です。(3b)は「拒絶」に該当します。(3c, d)は『ウィズダム英和辞典(第3版)』で「話者の意志・警告」とされている例です。(3e)は安藤(2005:102)に「おどし」とある例です。(3f)は『オーレックス英和辞典(第2版)』で「話者の意図を表す。しばしばおどしや約束の意味合いをもつ」とされています。(3g)は『ウィズダム和英辞典(第2版)』に「この **be going to** は二人称・三人称の主語に用いて話し手の強い意志を表す」とあります。いわば話し手による約束あるいは決意表明の文です。

(3)を大まかにまとめると、「文の中に現れていない話し手の意志」を伝えるのに使われていると言えます。そしてこれらは命令・拒絶・脅し・約束・決意表明など、いろいろな対人関係的な機能を果たします。

ところで、未来について語るのに使われる *be going to* は助動詞のようなものという印象があるかもしれません。それでは、次のような例はどうでしょうか。これらの *be going to* は助動詞と言えるでしょうか。

(4)

- a. She will **be going to** close the door.¹⁵
- b. He has to **be going to** start writing soon.¹⁶
- c. I assume John to **be going to** climb the tree.¹⁷

これらを日本語にすると、だいたい次のようになります。

(4')

- a. 彼女は(そのうち)ドアを閉める気配を見せるでしょう。
- b. 彼は間もなく執筆を始めるつもりに違いありません。¹⁸
- c. ジョンはその山に登るつもりでいると私は思っていますが。

これらが示しているのは、*be going to* が完全な助動詞としてではなく、ふつうの進行形と同じように使われることがある、ということです。

まず、完全な助動詞は二つ続けて使うことはできません。たとえば(5a)のように、*will* と *can* を続けて使うことはできません。

(5)

- a. * He will can tell you.
- b. He will be able to tell you.

このような意味を表したいときには、(5b)のように、完全な助動詞ではない *be able to* を使います¹⁹。

ところが、(4a)では *will* に続けて *be going to* が現れています。ということは、この場合の *be going to* は完全な助動詞にはなっていないということです。

また、完全な助動詞は *to* 不定詞としても用いられません。(6a)を見てください。

(6)

- a. * to can ...
- b. to be able to ...

このような意味を表したいときにもやはり、(6b)のように、*be able to* を使います。

ところが(4b-c)では、*to* に続けて *be going to* が現れています。ということは、この場合の *be going to* も完全な助動詞にはなっていないということです。

これだけではありません。*Be going to* は完了形で使われることもあるのです。

(7) I have **been going to** do that for ages.²⁰

私はずっとそれをしようと思ってきたのです。

この場合の *be going to* も、完全な助動詞にはなっていないわけです。

さらに別の観点からもう少し例を見てみましょう。次の例では *be going to* はどういう意味合いで使われているのでしょうか。

(8)

a. *You're always going to start tomorrow. But be honest with yourself: This is merely a game aimed at reducing guilt. Begin to improve your eating habits now.*²¹

b. *If you are always going to start tomorrow, you'll never start.*²²

これらを日本語にすると、だいたい次のようになります。

(8')

a. あなたいつだって「明日から」って言ってますよね。でも自分に正直になって認めましょうよ。「明日から」って言い続けるのは後ろめたい気持ちを少なくするためのお遊びでしかないんだって。食習慣の改善、今から始めましょう。

b. いつもいつも「明日からやります」と言っているようでは、いつまでたっても始められませんよ。

これらの例では、*be going to* は *always* と一緒に使われて、「繰り返し」を伝えるのに使われています。

ここまでの話をまとめると、次のようになります。

(9)

a. *Be going to* は「主語 (=話し手) が現在持っている意志・予定」「現在の状況に基づく未来のことについての見通し」を語るのに使うことができる。(1) (2)

b. *Be going to* は「文の中に現れていない話し手の意志」を伝えるのに使うことができ、命令・拒絶・脅し・約束・決意表明などの対人関係的な機能を果たす。

(3)

c. *Be going to* は完全な助動詞になりきっていない面がある。(4) (7)

d. *Be going to* は「繰り返し」を伝えるのに使われることがある。(8)

そしてこの章の課題を、次のように設定したいと思います。

(10)

a. *Be going to* はどのような表現であるかについての仮説を作る。

b. その仮説に基づいて(9)が説明できるかどうかを検証する。

c. さらに同じ仮説に基づいて、*be going to* の(9)以外の事実を説明できるかどうかを検証する。

つまり、基本的には「仮説の構築→事実と照らし合わせての検証」という手順で議論を進めていきます。構築した仮説が事実を説明できなければ、その限りにおいてその仮説は誤っていることとなります。その場合には、仮説のどこに問題があったかを検討することが必要となります²³。その問題の性質によって、仮説を丸ごと「破棄」するか、大枠は残したまま仮説を一部「修正」するか、もしくは全部残しつつ新しい概念を付け加えて「拡張」するか、のいずれかが必要となります。また、仮説が事実を説明できれば、その限りにおいてその仮説は誤っていない(とりあえず正しい)ということとなります。

3. *Be Going To* の正体についての仮説

ここでは、「*be going to* は何物か」という問題についての仮説を次のように設定します。

(11) *Be going to* は移動動詞 *go* の進行形である。

要は「見たまんま」ということです。ですが、この仮説はこれだけでは足りません。この仮説を実質のあるものにするためには、次の間に答えることが必要です。

(12)

a. *Be going to* に現れる移動動詞 *go* は、どのような意味をもつものか。

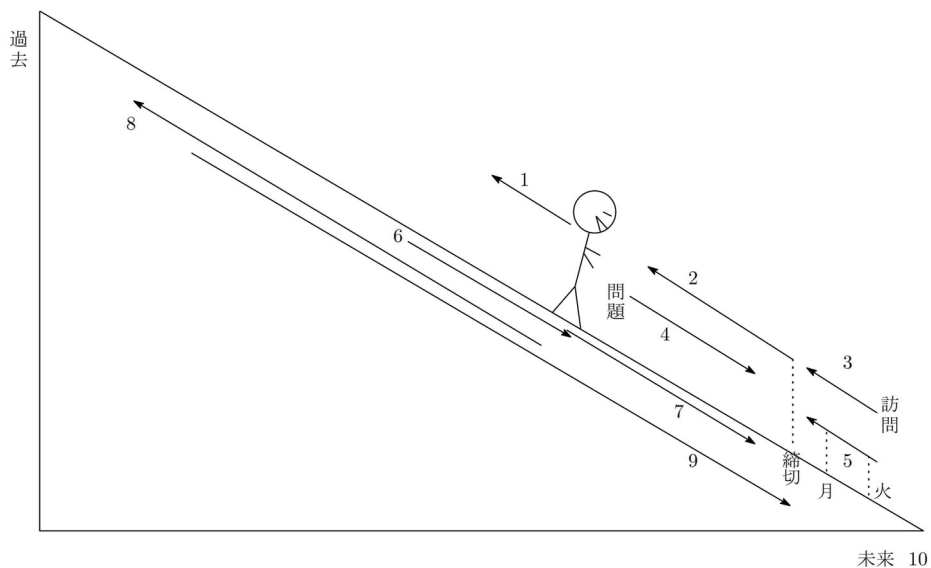
b. 英語の進行形は、どのような意味をもつものか。

以下、これについて順に考えていきます。

4. Goは何をどのように表すものか:比喩(メタファー)によるアプローチ

4.1. はじめに簡単な問題

まずは、次の図を参考にしながら、その下の(13)の表現を完成させてください。*Be going to* は英語の表現ですが、最初は日本語の例文で考えてみましょう。



(13)

- 1 過去を(1)てもしようがない。
- 2 締め切りが(2a)て(2b)。
- 3 訪問の予定を繰り(3)る。
- 4 問題を(4)送りする。
- 5 月曜日は火曜日の(5)だ。
- 6 これまで一生懸命がんばって(6)た。
- 7 これからも一生懸命がんばって(7)ます。
- 8 時代を(8)。
- 9 時代は(9)って明治元年。

10 この事業の(10)が心配だ。

私が用意した解答は、次の通りです。

(13')

- 1 過去を(振り返っ)てもしようがない。
- 2 締め切りが(近づい/せまっ)て(きた)。
- 3 訪問の予定を繰り(あげ)る。
- 4 問題を(先)送りする。
- 5 月曜日は火曜日の(前)だ。
- 6 これまで一生懸命がんばって(き)た。
- 7 これからも一生懸命がんばって(いき)ます。
- 8 時代を(さかのぼる)。
- 9 時代は(くだ)って明治元年。
- 10 この事業の(先行き/行く末)が心配だ。

これらの表現にはどのような特徴があるでしょうか。考えてみてください。
次は英語の問題です。下の英語表現の空欄を適切な英単語で埋めて、文を完成させてください。

(14)

- a. 私は神戸在住です:
I live (1) Kobe.
- b. 私は1月生まれです:
I was born (1) January.
- c. 神戸から大阪まで:
(2) Kobe (3) Osaka
- d. 月曜から金曜まで:
(2) Monday (3) Friday

(15)

- a. 京都が近づいてきた:
Kyoto is (4) .
- b. クリスマスが近づいてきた:
Christmas is (4) .

(16)

a. もうすぐ京都だ:

We are (5) Kyoto.

b. もうすぐクリスマスだ:

We are (5) Christmas.

c. もう神戸につきました:

We've (6) Kobe.

d. もう7月になりました:

We've (6) July.

私が用意した解答は、次の通りです。

(17)

a. 私は神戸在住です:

I live (in) Kobe.

b. 私は1月生まれです:

I was born (in) January.

c. 神戸から大阪まで:

(from) Kobe (to) Osaka

d. 月曜から金曜まで:

(from) Monday (to) Friday

(18)

a. 京都が近づいてきた:

Kyoto is (approaching).

b. クリスマスが近づいてきた:

Christmas is (approaching)

(19)

a. もうすぐ京都だ:

We are (approaching) Kyoto.

b. もうすぐクリスマスだ:

We are (approaching) Christmas.

c. もう神戸につきました:

We've (reached) Kobe.

d. もう7月になりました:

We've (reached) July.

これらの英語表現にはどのような特徴があるでしょうか。先ほどの日本語の例と合わせて考えてみてください。

4.2. 空間と時間をつなぐ比喩(メタファー)

(13')の表現には次のような特徴があります。

まず第一に、もともと空間を表すのに使われていた表現が、これらの例では時間を表すのに使われています。「振り返る」「近づく」「せまる」「くる」「あげる」など、すべてそうです。

第二に、一つの表現だけでなく、多くの空間表現が一斉に時間を表すのに使われています。

第三に、それらが互いにつじつまが合う形で使われています。ここでつじつまが合うというのは、上に提示した図で矛盾なく適切に捉えられるようになっている、ということです。たとえば、日本語の表現で「過去を振り返る」とは言いますが、「#未来を振り返る」とは言いません。このことは、図に「未来を振り返る」を書きこむことができないことと対応しています。また、「前向きに生きる」と言えば未来のことを考えながら生きることであって、過去のことを考えながら生きることではありません。このことも図で捉えることができます。

これらの特徴から、(13')では、時間を空間に見立てて捉えていると考えられます。空間と時間は別のものですが、まるで時間を空間であるかのように見立てて、時間の構造を空間の構造に基づいて理解・表現しているわけです。つまり次のような比喩(メタファー)に基づいて時間を理解・表現しているわけです。

(20) 時間は空間である。

そして(13')はこのような比喩的認識に基づく比喩表現ということになるわけです。認知意味論では、この比喩的な認識を「概念メタファー」と呼び、それに基づく言語表現を「メタファー表現」と呼んでいます。

比喩表現と言うと文学的な表現を思い浮かべるかもしれませんが、(13')は日常的な表現としてごくごく普通に使われるものです。そしてそもそも、(13')が時間を空間に見立てて表現している比喩表現だということに、こうして指摘さ

れるまで気がつかずに使ってきた人もいるかもしれません。

それでは、なぜ比喩表現が日常的に使われるのでしょうか。それを考えるために、ためしに時間についていっさいの比喩表現を使わずに語ってみてください。「過去」「現在」「未来」「時間」はどうでしょうか。「過ぎる」「去る」はもともとは空間移動に関わるものです。「在る(ある)」は空間の中の存在を表します。「未来」は「まだ来ていない」ということです。「時間」の「間」は「あいだ」で、やはり空間に関わるものです。つまり、これらはもともとは空間に関わる表現なわけです。

「時間がかかる」「時間を無駄にする」などはどうでしょうか。これらは空間表現がもともとなったものではありません。しかしこれらは、もともと「お金がかかる」「お金を無駄にする」などのように、「お金などの貴重な資源」に使われる表現です。つまりこれも、比喩表現なのです。時間について、比喩を一切使わず直接語るのは、とても難しいことなのです。もしかしたら不可能かもしれません。

そもそも「時間」とは何でしょうか。時間という経験は人間にとって非常に基本的なものです。だれでも時間を経験し、認識します。しかし、「時間って何？」とあらためて問題にされると、どう答えていいか分からない、という人が多いのではないのでしょうか。皆さんのもっている日本語辞書(国語辞典)では「じかん」はどのように解説されているのでしょうか。皆さんそれぞれ確認してみてください。それは皆さんがふだん「時間」という語を使うときの直観や、時間について語るときの感覚をきちんと(比喩を使わずになおかつ適切に)説明してくれているのでしょうか。

要は、「時間」というのは私たちにとってわけのわからないものなのです。時間は人間にとって基本的な経験です。しかし、基本的な経験なのにわけが分からないのです。というよりむしろ、基本的な経験だからこそ、かえってわけが分からないのでしょう。いずれにしても、わけが分からない。

わけが分からないけれども、人間は時間について考えたり、時間について語ったりしたいわけです。そこで人間がやっているのが、時間の構造を空間やお金などの構造に見立てる比喩で捉える、ということです。そこで

(20) 時間は空間である

という比喩的認識に基づいて考え、語るわけです。

「時間は空間」なのだから、空間について人間が認識している構造を、そのまま時間に当てはめることになります。それによって時間の構造が分かったこ

とになるわけです。その結果、数多くの空間表現が時間表現として使われることとなります。また、空間の構造を時間に当てはめて時間の構造を理解することから、たくさんの空間表現が互いにつじつまの合う形で(つまり体系性をもった形で)時間表現として使われることになるわけです。

(17)から(19)までは、英語にも同じような比喩があることを示しています。これらもやはり、もともと空間表現だったものが時間表現として使われています。

先に述べたように、(13')が時間を空間に見立てて表現した比喩表現(メタファー表現)だということに、こうして指摘されるまで気がつかなかった人もいるかもしれません。ということは、日常の言語には、これ以外にも比喩がたくさん紛れ込んでいるかもしれない、という予想ができます。実際この予想は正しく、日常的な言語表現の中では比喩表現が(そうと気づかれないまま)数多く使われている、ということが認知意味論の研究で明らかになっています。

4.3. *Be going to*～の *Go*

Be going to の *go* は、このように時間を空間に見立てて捉えるメタファー表現の一つと捉えることが自然でしょう²⁴。したがって、「*Be going to* の *go* は何をどのように表すものか」という問には、仮説として次のような答えを提示することができます。

(21) *Be going to* の *go* は将来の出来事に向けての主語のあり方を将来の出来事に向かっての主語の時間軸上の移動として表すものである。

5. 英語の進行形の意味

5.1. 進行形の意味の記述

英語の進行形については数多くの研究がありますが、私を見る限りもっともすぐれているのは友澤宏隆氏による研究²⁵です。その議論の核心部分を示せば、英語の進行形の意味は、次のように記述されます。

(22) 英語の進行形は、始まりと終わりがあると認識されている出来事の、始まり・終わりを含まない途中の部分を示す。

といっても、これだけ見てもよく分からないかもしれません。以下、例を見ながら考えていきます。

5.2. 例文で考える進行形(1)

(23)

- a. John was swimming in the river. ジョンは川で泳いでいた
 b. Mary was drawing a circle. メアリーはマルを書いている途中だった。

(23a)の *swim in the river* 「川で泳ぐ」は、始まりと終わりがあると認識される出来事です。*Be swimming in the river* という進行形はこの出来事の、始まりと終わりを除いた途中の部分を指し示しています。(23b)では、*draw a circle* 「マルを書く」は、やはり始まりと終わりがあると認識される出来事です。*Be drawing a circle* という進行形はやはり、この出来事の始まりと終わりを除いた途中の部分を指し示しています。

以上が(23a)と(23b)に共通する特徴ですが、この二つには違う点もあります。(23a)の *swim in the river* という行為は、「どこで終わるか」があらかじめ決まっています。続けようと思えばいつまでも続けることができる行為です²⁶。それに対して(23b)の *draw a circle* はマルが書き上がる時というはっきりとした終点があります²⁷。

また、*swim in the river* は途中の一部分だけをとっても *swim in the river* になります。したがって、次の(24a)が真であるならば、(24b)も必ず真になります。

(24)

- a. John was swimming in the river. ジョンは川で泳いでいた
 b. John swam in the river. ジョンは川で泳いだ

それに対して、*draw a circle* は途中の一部分だけとったのでは最終的にマルが完成したことになるかどうかは分かりません。つまり *draw a circle* したことになるかどうかは分かりません。したがって、次の(25a)が真であったとしても、(25b)が必ず真になるとは限りません。状況によって、真になったり偽になったりします。

(25)

- a. Mary was drawing a circle. メアリーはマルを書いている途中だった。
 b. Mary drew a circle. メアリーはマルを書いた。

繰り返しになりますが、*swim in the river* 「川で泳ぐ」は、「どこで終わるか」

があらかじめ決まっていなくて、続けようと思えばいつまでも続けることができる行為です。しかしそうは言っても、これはいつかは必ず終わると捉えられる出来事です。この点が、*swim in the river* と次の *know the answer* 「答えを知っている」の違いになります。

(26)

a. He knows the answer.

b. * He is knowing the answer.彼は答えを知っている。

Know the answer 「答えを知っている」は、日本語では「知っている」と「ている」を使って表されますが、この英語表現は進行形にすることはできません²⁸。*Know the answer* は始まりと終わりがあるとは認識されない、状態を表す表現です。このような表現は進行形にすることはできないのです。

ところで、*write a letter* 「手紙を書く」を用いた次の二つの文のうち、彼が手紙を書き終わったと確実に言えるのはどちらの場合でしょうか。

(27)

a. He was writing a letter.

b. He wrote a letter.

実はこれは先ほどの(24) *draw a circle* と同じ問題です。手紙を書き終えたと確実に言えるのは単純過去形の(27b)の方です。進行形を使った(27a)は、手紙を書き終わったかどうかについては何も言っていません。なので、書き終わった場合と書き終わらなかった場合のどちらにも使うことができます。ただ、書き終わった場合には単純過去形で(27)のように言うのが普通なので、進行形の(27a)は通常は書き終わらなかった場合に使います。

このような(27a)の解釈を(22)で説明すると、どうなるでしょうか。

(22)が言っていることは、英語の進行形が指し示すのは出来事の途中だけであって、(始まりと)終わりは指し示す部分に含まれないということです。これは、出来事の終わりが現実にはどうなってもいいということです。だからこの場合で言えば、手紙は書きあがっていてもいいし、書きあがっていてもいいわけです。

念のために補足しておく、これは、(27a)に「手紙が書き上がった場合」と「書きあがらなかった場合」の二つの意味があるということではありません。進行形が指し示しているのはあくまでも「途中」だけであって、書き上がった

かどうかはどうでもいいのです。つまり(27a)は「二つの意味があって曖昧」ということではなく、「意味は一つ、その一つの意味に二つの場合が当てはまる」ということです。

このことは分かりにくいかもしれないので、少しだけ補足しておきましょう。たとえば「ひと」という語には、男性、女性、その他、あるいは大人、子供、高校生、その他、などなど、いろいろな場合が該当します。しかし「ひと」という語に「男」「女」などのたくさんの意味があるわけではありません。「ひと」の意味は一つです。その一つに、いろいろな事例が当てはまる、ということです。(27a)の *He was writing a letter* が、「二つの意味があって曖昧」ということではなく、「意味は一つ、その一つの意味に二つの場合が当てはまる」ということだということも、これと同じことです。

5.3. 例文で考える進行形(2)

ここからは少し違うタイプの英文を考えます。次の英語表現はどのような意味になるでしょうか。また、これらは(22)で捉えることはできるでしょうか。

(28)

a. He is arriving pretty soon.

b. I'm taking Mary out for dinner this evening.

(28a)は、「ている」を使って「到着している」とするとおかしくなります。この文は、「彼はすぐに到着します」という意味です。(28b)も、「メアリーを食事に連れ出している」ではなく、「食事に連れ出すことになっている」という予定を語る文です。これらは(22)で捉えることはできるでしょうか。

(28)を理解する上でカギになるのは、「前段階がある」ということです。*Arrive* 「到着する」というのは一瞬の出来事なので、それ自体には途中はありません。しかし、「到着」には必ず、前段階としての「移動」があります²⁹。この前段階も加えた「移動+到着」が、始まりと終わりがあると認識される出来事に当たります。*He is arriving* は「移動+到着」の始まりと終わりを除いた途中を指し示しています。つまり、「現在移動中である(そしてもうすぐ到着する)」ということなのです。

(28b)も同様に、前段階がカギになります。この文は、「連れていく手はずが整った状況である」ということを表します。前段階としての「連れていく手はずが整っている」という状況+「連れていくという行為」をあわせたものが、始まりと終わりがあると認識される出来事に当たります。*I am taking Mary out*

for dinner は「手はずが整っている状況+連れていくという行為」の始まりと終わりを除いた途中を指し示しています。そこでこの文は「連れていく手はずが整った状況である」ということを表すことから、「連れていくことになっている」という意味合いで使われることになるわけです。

つまり(28)も、(22)で捉えることができるということです。
最後に、次の文を考えてみましょう。

(29) He was kicking the ball.

Kick the ball 「ボールを蹴る」という行為は瞬間的なものなので、始まりと終わりを除いた途中というのは考えにくいものです。このような場合、「途中」を認識するには二つのやり方があります。一つは「スローモーション」のように捉えることです。もう一つは何回も繰り返されたものとして捉えることです。ここでは繰り返しについて考えます。

Kick the ball 「ボールを蹴る」それ自体は瞬間的な行為で、始まりと終わりを除いた途中は考えにくいものです³⁰が、この同じ行為が何度も繰り返された場合には、それをまとめれば、ある程度の長さのある出来事と見なすことができます。繰り返しによって長さのあるものとなった出来事の、始まりと終わりを除いたものを指し示すのが(29)ということになります。そこで(29)は「ボールを(さっきから何回も)蹴っている」という意味合いになります。

「繰り返し」の解釈は次のような場合にもあります。

(30)

- a. We are going to the opera a lot these days.
- b. She is always complaining.

これらは次のような解釈になります。

(31)

- a. このところ頻繁にオペラに行っています。
- b. あの人は文句ばかり言っています。

以上が英語の進行形についての友澤氏の説の紹介です。

5.4. 進行形としての *Be Going To*

さて、*be going to* が移動動詞 *go* の進行形だとすると、これは進行形の例文のどれにいちばん近いことになるのでしょうか。具体的には、次のうちのどれに該当するのでしょうか。

(32)

- a. John was swimming in the river. ジョンは川で泳いでいた (23a)
- b. Mary was drawing a circle. メアリーはマルを書いている途中だった。
(23b)
- c. He is arriving pretty soon. 彼はもうすぐ到着します (28a)
- d. I'm taking Mary out for dinner this evening. 今晚メアリーを食事に連れていく
ことになっています (28b)

Be going to が未来を語るのに使われる表現だということに惑わされないように、十分注意しながら考えてください。

Be going to が未来表現ということで、この進行形は *I'm taking Mary out for dinner this evening* (32d) か、あるいは *He is arriving pretty soon* (32c) のタイプの進行形と思われたかもしれませんが。しかしそう考えるとおかしいことになります。というのは、そのように考えると、移動動詞 *go* があってもなくても文の意味に影響しないということになってしまいます。そうすると、*go* が表す未来の出来事に向かっての移動はどうなるのでしょうか。

ということで、*be going to* は(32d)や(32c)のタイプと考えるのは無理があることとなります。

実は、*be going to* は、*Mary was drawing a circle* (32b) のタイプの進行形と考えるのが自然です。*Be going to...* は *go to...* の進行形ですが、*go to ...* が指し示すのは ... という出来事に到達したところで完結する移動です。したがって *go to ...* は *draw a circle* と同じタイプの表現と言えます。

6. *Be Going To* についての仮説(とりあえずのまとめ)

この章では、*be going to* について基本的に次の手順で議論していくと述べました。

(10)

- a. *Be going to* はどのような表現であるかについての仮説を作る。

- b. その仮説に基づいて(9)が説明できるかどうかを検証する。
- c. さらに同じ仮説に基づいて、*be going to* の(9)以外の事実を説明できるかどうかを検証する。

そして(10a)について、次の仮説をたてました。

(11) *Be going to* は移動動詞 *go* の進行形である。

この仮説が具体的な内容をもつには、次の問いに答えることが必要でした。

(12)

- a. *Be going to* に現れる移動動詞 *go* は、どのような意味をもつものか。
- b. 英語の進行形は、どのような意味をもつものか。

この問に対する答えを *be going to* に即してまとめると、次のようになります。

(33)

- a. *Be going to* に現れる移動動詞 *go* は、未来の出来事に向かっての時間軸上の移動を指し示す。
- b. 進行形としての *be going to...* は、*go to...* という始まりと終わりがある出来事の途中を指し示す。

以上が(10a)に当たる部分です。

7. 事実に照らし合わせての仮説の検証(1)

この節から、(10b)の検証の手続きに移ります。

(10)

- a. *Be going to* はどのような表現であるかについての仮説を作る。
- b. その仮説に基づいて(9)が説明できるかどうかを検証する。
- c. さらに同じ仮説に基づいて、*be going to* の(9)以外の事実を説明できるかどうかを検証する。

先に、*be going to* についての事実を次のようにまとめました。

(9)

a. *Be going to* は「主語(=話し手)が現在持っている意志・予定」「現在の状況に基づく未来のことについての見通し」を語るのに使うことができる。(1)(2)

b. *Be going to* は「文の中に現れていない話し手の意志」を伝えるのに使うことができ、命令・拒絶・脅し・約束・決意表明などの対人関係的な機能を果たす。

(3)

c. *Be going to* は完全な助動詞になりきっていない面がある。(4)(7)

d. *Be going to* は「繰り返し」を伝えるのに使われることがある。(8)

これらのうち、(9c)は簡単です。*Be going to* が *will* や *to* の後に現れたり(4)完了形で使われたり(7)することは、*be going to* が動詞 *go* の進行形であるということの説明ができます。一般に進行形はこれらの環境に現れることができるからです。

(9d)も同様です。進行形が *always* と一緒に使われて「繰り返し」に使われるのは(30)で見た通りです。

しかし、いちばん肝心な(?)、(9a,b)の意味合いがどこから出てくるのかということ、どのように説明されるのでしょうか。

(34)

a. **We are going to get a new car soon.** (= (1))

もうすぐ新しい車を買います(買うつもりです/買う予定でいます)。

b. **Sandra's going to have another baby in June.** (= (2b))

サンドラは次の子どもを6月に出産します(出産する予定です)。

この章の仮説に基づいてこれらの例の意味を解釈すると、(35)のようになります。

(35)

a. 私たちは、もうすぐ新しい車を買うという出来事に向かって、いま時間軸上を移動中である

b. サンドラは、6月に次の子どもを出産するという出来事に向かって、いま時間軸上を移動中である

(35)は(34)の意味をそれなりに捉えているとは言えるでしょう。しかし、実はこれだけでは十分ではありません。「意志・予定」「見通し」といった区別は

どこからくるのでしょうか。

また、(9b)の「文の中に現れていない話し手の意志」はどうなるのでしょうか。

(3)

a. **You are not going to play football in my garden.**

うちの庭でサッカーなんかしないでくれ！

b. **I'm not going to sit up all night listening to your problems!**

一晩中徹夜であんたの悩み事に付き合うつもりなんかないからな！

c. **No, you're not going to use that!**

だめ、それ使っちゃ！

d. **Your interview is going to be held in my office.**

面接は私の執務室で行います。

e. **He's going to suffer for this.**

あいつめ、このお返しに懲らしめてやるぞ。

f. **You are going to do as I tell you.**

私の言うとおりにしてもらいます

g. **Nothing's going to stop me from succeeding this time.**

今度は何が何でもうまくやってみせるよ。

これらについては、この章の仮説に新しい概念を付け加えることで「拡張」することで説明する可能性を探っていきましょう。

8. 主語の移動の原因を考える: 「力のせめぎ合い」によるアプローチ

Be going to を移動動詞 *go* の進行形と仮定することの一つのメリットとして、主語の移動の「原因」を想定することができる、ということがあります。主語の比喩的な移動の原因としてはいろいろなものが想定できます。そしてその原因は、「意志」「意図」のように比較的簡単に特定できる場合もあります。その一方で、何が原因か特定することは困難だが、とにかく何らかの原因があることは間違いない、という場合もあります。

そこで、第2節の例文は、「主語の移動の原因」を想定することで説明できるのではないかという見通しが立ちます。この見通しを検証してみましょう。以下、例文を順番に考えていきます。

(1) **We are going to get a new car soon.**

もうすぐ新しい車を買います(買うつもりです/買う予定でいます)。

この例の場合、移動の原因として「主語(=話し手)の意志」を想定することができます。そしてそのように想定すれば、「主語(=話し手)の意志・予定」を語るというこの文の用法を説明することができます。

(2)はどうでしょうか。

(2)

a. Look at the sky. It's **going to** rain.

空見て。雨になるよ(なりそうだよ)。

b. Sandra's **going to** have another baby in June.

サンドラは次の子どもを6月に出産します(出産する予定です)。

(2a)に関しては、天気の変化の原因はよく分かりません。よく分かりませんが、とにかく何らかの原因があることは間違いないでしょう。そして、その結果として、天気は現在「降雨」に向かって移動中であることが空の様子から明らかです。ということで、「雨になる」という「現在の状況にもとづく見通し」を語るというこの文の用法が説明できるわけです。「出産予定」について語る(2b)の用法もだいたい同じように説明できます。

(3)はどうでしょうか。

(3)

a. You **are not going to** play football in my garden.

うちの庭でサッカーなんかしないでくれ!

b. I'm **not going to** sit up all night listening to your problems!

一晩中徹夜であんたの悩み事に付き合うつもりなんかないからな!

c. No, you're **not going to** use that!

だめ、それ使っちゃ!

d. Your interview **is going to** be held in my office.

面接は私の執務室で行います。

e. He's **going to** suffer for this.

あいつめ、このお返しに懲らしめてやるぞ。

f. You **are going to** do as I tell you.

私の言うとおりにしてもらいます。

g. Nothing's **going to** stop me from succeeding this time.

今度は何が何でもうまくやってみせるよ。

まずは肯定文である (3d, e, f) から考えましょう。これらは文の中に現れていない話し手の意志を主語の移動の原因として想定することで用法を説明することができます。

否定文である (3a, b, c, g) はどうなるでしょうか。否定文の場合には、「主語の移動の原因」の他に「主語の移動を阻止する要因」や、「主語の移動の存在の否定」を想定することができます。

(3a, c) の場合、「主語の移動の原因」として主語 (*you*) の意志を想定することができますでしょう。そして *not* に関わる「主語の移動を阻止する要因」として、「文の中に現れていない話し手の意志」を想定することができます。このような、移動の原因 (主語 *you* の意志) と移動を阻止する要因 (文中に現れていない話し手の意志) のせめぎ合いを考えることで、この文の用法が説明できます。

(3b) については、「主語の移動の原因」として主語・話し手 (*I*) の意志を想定することができますでしょう。そして *not* は、「主語の移動自体が存在していない」ということを表すと想定することができますでしょう。そのように想定することで、この文の用法を説明することができます。

(3g) については、「主語の移動の原因」は特定できません。そして *nothing* に含まれる否定の *no* に関わる「主語の移動を阻止する要因」として、「文の中に現れていない話し手の意志」を想定することができます。このことから、「私が成功するのを何物にも止めさせない」→「何が何でも成功してやるぞ」ということで、この文の用法が説明できます。

この節で *be going to* に適用した考え方は「力のせめぎ合い」 (*force dynamics*) と呼ばれるもので、認知意味論では非常に重要視されている考え方の一つです³¹。

以上で、先に *be going to* についてまとめた事実

(9)

a. *Be going to* は「主語 (=話し手) が現在持っている意志・予定」「現在の状況に基づく未来のことについての見通し」を語るのに使うことができる。(1) (2)

b. *Be going to* は「文の中に現れていない話し手の意志」を伝えるのに使うことができ、命令・拒絶・脅し・約束・決意表明などの対人関係的な機能を果たす。

(3)

c. *Be going to* は完全な助動詞になりきっていない面がある。(4) (7)

d. *Be going to* は「繰り返し」を伝えるのに使われることがある。(8)

のうち、未解決だった (9a,b) も説明されたこととなります。

9. 事実に照らし合わせての仮説の検証(2)

前節までで、(10)として提示したこの章の課題のうち、(10b)まで終わりました。

(10)

- a. *Be going to* はどのような表現であるかについての仮説を作る。
- b. その仮説に基づいて(9)が説明できるかどうかを検証する。
- c. さらに同じ仮説に基づいて、*be going to* の(9)以外の事実を説明できるかどうかを検証する。

この節では(10c)に移りたいところですが、たいへん残念なことに、規定の枚数をすでに(大幅に)越えています。そこで、章末問題として第11節に問題だけ提示しておきたいと思います。解答はみなさんそれぞれにお任せしたいと思います。

10. 結び: この章でやったこと、やらなかったこと

この章では *be going to* がどのような仕組みで未来を表すかについて議論してきました。

まず第2節で *be going to* に関して説明すべき事実をまとめた後、章の課題を次のようにまとめました。

(10)

- a. *Be going to* はどのような表現であるかについての仮説を作る。
- b. その仮説に基づいて(9)が説明できるかどうかを検証する。
- c. さらに同じ仮説に基づいて、*be going to* の(9)以外の事実を説明できるかどうかを検証する。

(10a)としては第6節までで次の(33)を提示しました。

(33)

- a. *Be going to* に現れる移動動詞 *go* は、未来の出来事に向かっての時間軸上の移動を指し示す。
- b. 進行形としての *be going to ...* は、*go to...* という始まりと終わりがある出来事の途中を指し示す。

(33a)には空間から時間への比喩(メタファー)が関わっていることについても述べました。

第7節で(33)に基づいて(10b)に取り掛かり、(33)で説明しきれない部分に関しては第8節で「力のせめぎ合い」の概念を導入することで説明できることを示しました。そして(10c)についてはページ数の都合で章末問題にゆだねることにしたのでした。

以上が、この章でやったことです。一方で、この章ではあえてやらなかったこともあります。それは「*Be going to* について *will* との対比で考える」ということです。それにはもちろん理由があります。それは「*Be going to* が未来を表す仕組みと *will* が未来を表す仕組みが、根本的に違う」ということです。

この章の目標は「*Be going to* はどのような仕組みで未来を表すか」を明らかにすることでした。そしてこれまでの議論に、*will* に関わる事柄は出てきませんでした。したがって、*will* に関して「*Will* はどのような仕組みで未来を表すか」を議論するとすると、これまでの議論とは全く違う議論をすることになります。一つの章でまったく異なる話を二つすることは避けたいというのが筆者である私の希望でした。そのため、この章では *will* の話はせず、ひたすら *be going to* のことだけを議論してきたのでした。

以上でこの章を閉じます。

11. 章末問題

11.1 電話が鳴っているときに

昔から家庭にあるような固定電話が鳴っているところを想像してください。その時、「私が出ます」と英語でいう場合、少なくとも次の二つの言い方がありません。

(36)

- a. I'll answer it.
- b. I'm going to answer it.

そこで問題です。

(37)

- a. その場で気をきかせて「出ます」と言う場合にはどちらがより自然でしょう

か。また、電話が鳴った時に出ることが前から決まっていた係の人の言葉としてはどちらがより自然でしょうか。

b. *Be going to* がそのような使われ方になる仕組みは、この章の考え方ではどのように説明されるでしょうか。

11.2. 出産の話

女性の妊娠・出産についての話です。

(38)

a. She will have a baby in July.

b. She's going to have a baby in July.

そして問題です。

(39)

a. 話し手が勝手に想像して「7月でしょ」と言う場合にはどちらがより自然でしょうか。話し手がすでに話を聞いていて、決まった予定日のことを話す場合には、どちらがより自然でしょうか。

b. *Be going to* がそのような使われ方になる仕組みは、この章の考え方ではどのように説明されるでしょうか。

11.3. あれを見ろ！

(40)

a. Look! It's going to rain.

b. # Look! It will rain.

(41)

a. Look! That kid is going to fall off his bike.

b. # Look! That kid will fall off his bike.

問題です。これらの場合に *will* を使うと変な感じになるのですが、*be going to* は自然に使えます。*Be going to* が自然に使える仕組みは、この章の考え方ではどのように説明されるでしょうか。

11.4. 過去形にしてみる

再び電話の話です。

(42)

- a. I was going to call him last night.
- b. I called him last night.

(43)

- a. 上の二つの文のうち、(42b)は「確かに電話しました」と言っていると解釈されます。それでは(42a)はどのように解釈されるでしょうか。
- b. *Be going to* がそのような意味になる仕組みは、この章の考え方ではどのように説明されるでしょうか。

11.5. 反例を探す

Be going to について、この章の仮説では説明できない事実を見つけてください。そしてその事実を説明するためには、仮説を丸ごと「破棄」することが必要か、それとも大枠は残したまま仮説を一部「修正」することで対応できるか、もしくは仮説は丸ごと残したまま新しい概念を付け加えて「拡張」することで対応することができるか、考えてください。

11.6. 根本的な問題

Be going to は一般に未来を表す表現と言われています。しかしその一方で、*be going to* は *He is going to ...* のように、少なくとも形式上は現在形で使われます。これはなぜなのでしょう。

かりに「*Be going to* は意味としては未来を指し示すのに形としては現在形なのはなぜか？」と問われたとして、その問いに、「*Be going to* は未来を現在との繋がりで指し示すから」と答えるのは、この章の考え方によれば、厳密には正しくないこととなります。この答えにはこの章の考え方とどのような食い違いがあるのでしょうか。そして、この章の考え方に合う答えはどのような答えでしょうか。

注

1-4 Swan (2005: 214) より。

5-6 『ウィズダム英和辞典(第3版)』 s.v.go より。

- 7 安藤(2005:102)より。
- 8 安藤(2005:102)、『オーレックス英和辞典(第2版)』s.v.goより。
- 9 『ウィズダム和英辞典(第2版)』s.v.「なにがなんでも」
- 10 『ウィズダム英和辞典(第3版)』から訳を一部改変。
- 11 『ウィズダム英和辞典(第3版)』より。
- 12 安藤(2005:102)より。
- 13 『オーレックス英和辞典(第2版)』より。
- 14 『ウィズダム和英辞典(第2版)』s.v.「なにがなんでも」
- 15 Langacker(1990:23-24)。
- 16 Dixon(2005:173)。
- 17 Dixon(2005:73)。
- 18 *have to* には「～しなければならない」の他に「～に違いない」という意味もあります。ここでは後者の意味に解釈しています。
- 19 この例文は Dixon(2005:73)にあるものです。
- 20 この例文は Langacker(1991:233n.19)にあるものです。
- 21 *Soft steps to a hard body* (Ellington Darden, 1993, p. 173)
- 22
- <http://www.thestonefoundation.com/7-sayings-to-inspire-a-happier-and-healthier-you/>
- 23 ただしこの章ではこれは詳しくはやっていません。
- 24 これとは違う考え方もありますが、それについての検討はこの本では割愛します。
- 25 くわしくは友澤(2002)、本多(2000a, 2000b, 2001) および Tomozawa(1988a, 1988b)をお読みください。
- 26 アスペクトの研究ではこのようなものを一般に“activity”と呼びます。
- 27 アスペクトの研究ではこのようなものを一般に“accomplishment”と呼びます。
- 28 これは日本語の「ている」と英語の進行形では基本的な性格が異なるということに関連していますが、それについてはこの章では割愛します。
- 29 アスペクトの研究ではこのようなものを一般に“achievement”と呼びます。
- 30 アスペクトの研究ではこのようなものを“semelfactive”と呼ぶことがあります。
- 31 Talmy(1988, 2000)。

参考文献

Dixon, R. M. W. (2005). *A Semantic Approach to English Grammar*. Oxford: Oxford University Press.

- Langacker, R. W. (1990). "Subjectification," *Cognitive Linguistics*, 1 (1), 5-38.
- Langacker, R. W. (1991). *Foundations of Cognitive Grammar, Volume II: Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Swan, M. (2005). *Practical English Usage* (3rd ed.). Oxford: Oxford University Press.
- Talmy, L. (1988). "Force Dynamics in Language and Cognition," *Cognitive Science*, 12, 49-100.
- Talmy, L. (2000). *Toward a Cognitive Semantics, Volume I: Concept Structuring Systems*. Cambridge, MA.: The MIT Press.
- Tomozawa, H. (1988a). *The Semantics of the English Progressive: A Conceptualist Approach*. M. A. Thesis, University of Tokyo.
- Tomozawa, H. (1988b). "Some Remarks on the English Progressive: From a Conceptualist Point of View," *Linguistic Research*, 6, 108-127. Tokyo University English Linguistics Association.
- 『ウィズダム英和辞典(第3版)』 (2013)
- 『ウィズダム和英辞典(第2版)』 (2013)
- 『オーレックス英和辞典(第2版)』 (2013)
- 安藤貞雄 (2005). 『現代英文法講義』. 東京: 開拓社. (2008年第6刷).
- 柏野健次 (2012). 『英語語法詳解:英語語法学の確立へ向けて』. 東京:三省堂
- 友澤宏隆 (2002). 「英語進行形の概念構造について」. 西村義樹 (編), 『認知言語学 1:事象構造』, 137-160. 東京:東京大学出版会
- 本多啓 (2000a). 「方言文法と英文法(1): 宇和島方言の進行形をめぐって」. 『駿河台大学論叢』, 20, 91-111.
- 本多啓 (2000b). 「方言文法と英文法(2): 宇和島方言の完了形をめぐって」. 『駿河台大学論叢』, 21, 111-132.
- 本多啓 (2001). 「方言文法と英文法(3): 共通語の完了・進行形への展望」. 『駿河台大学論叢』, 22, 73-93.